

# 11)流行性耳下腺炎

(定義) ムンプスウイルス感染により耳下腺が腫脹する感染症である。

平成29年の流行性耳下腺炎は、小児科定点医療機関から4717人(累積定点当たり報告数87.35)の報告があり、平成28年(5420人)より703人少なかった。1年を通して昨年と同様に高値で推移した(図2-11-1)。全国と比較すると、1年を通して高値で推移した(図2-11-3)。保健所別では、西之表、名瀬、鹿屋の順に(図2-11-2)、年齢別では、5歳(16.3%)、4歳(14.7%)、6歳(13.0%)の順に多かった(図2-11-4)。

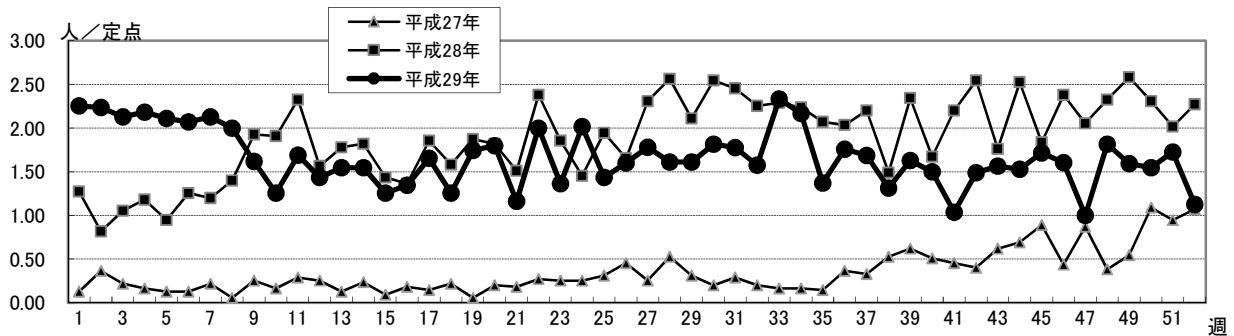


図2-11-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

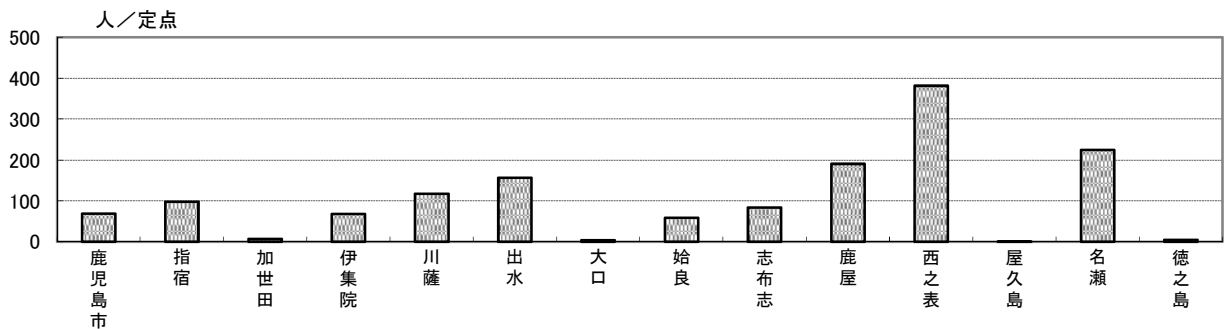


図2-11-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

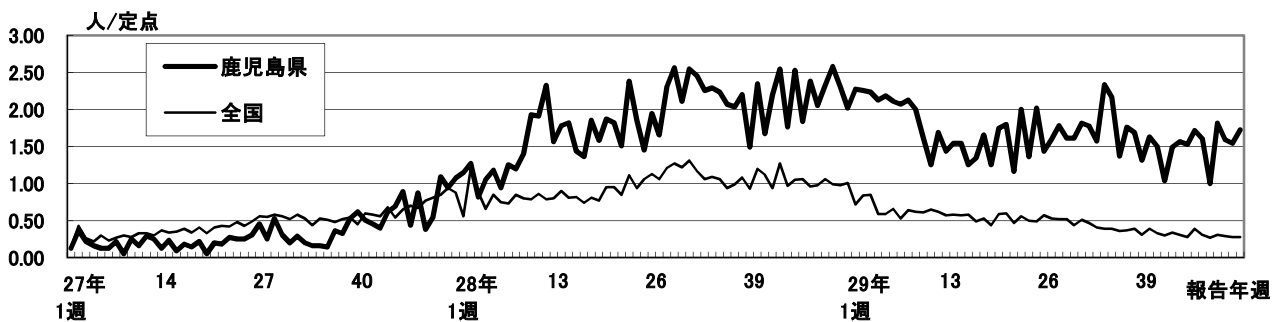


図2-11-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

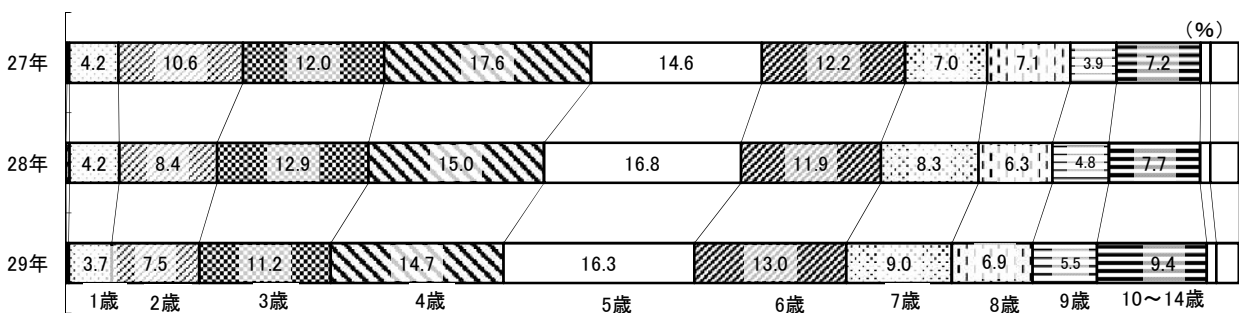


図2-11-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 12)RSウイルス感染症

(定義) RSウイルス(respiratory syncytial virus)による急性呼吸器感染症である。乳児期の発症が多く、特徴的な病像は細気管支炎、肺炎である。

平成29年のRSウイルス感染症は、小児科定点医療機関から3358人(累積定点当たり報告数62.19)の報告があり、平成28年(2254人)より1104人多かった。本年は、第35週(4.94)に大きなピークがみられ、第43週まで高値が続いた(図2-12-1)。全国と比較すると、早期より高く推移し、ピーク(第30週)は全国より高値であった(図2-12-3)。全国も例年と比較すると多い報告数であった。保健所別では、西之表、川薩、始良の順に多く(図2-12-2)、年齢別では、1歳(36.3%)、6~11ヶ月(23.0%)、0~5ヶ月(16.3%)の順に多く、1歳以下の報告数が全体の約76%を占めた(図2-12-4)。

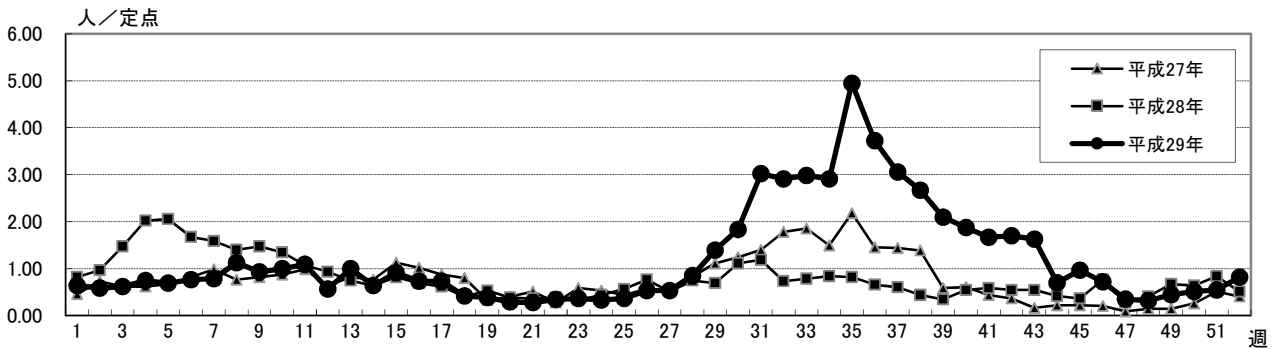


図2-12-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

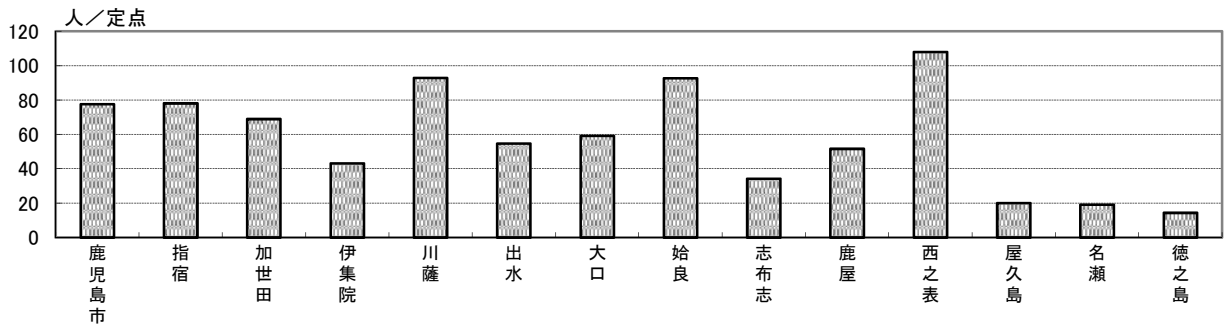


図2-12-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

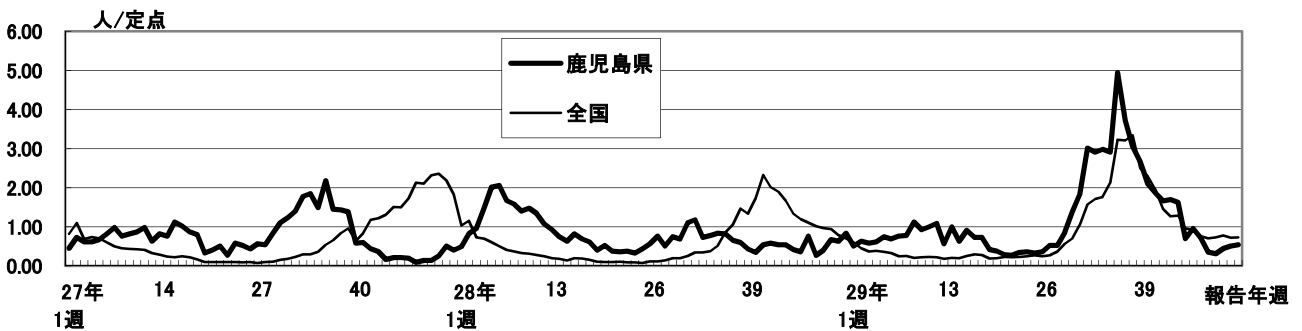


図2-12-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

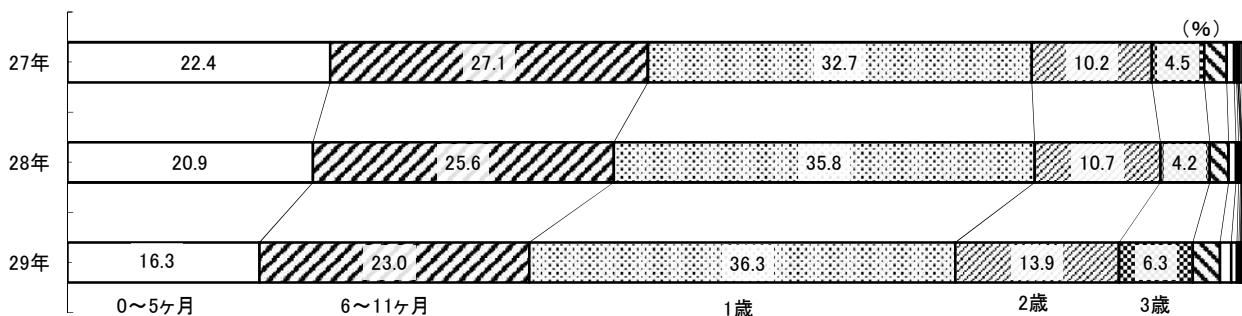


図2-12-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

### 13)細菌性髄膜炎(髄膜炎菌性髄膜炎は除く)

(定義) 種々の細菌感染による髄膜の感染症である。

平成29年の細菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から8人(累積定点当たり報告数0.67)の報告があり、平成28年(4人)より4人多かった(図2-13-1)。全国的にも大きな流行は認められなかった(図2-13-1, 図2-13-3)。保健所別では、名瀬(3人)、鹿児島市、出水(それぞれ2人)、始良(1人)の報告があった(図2-13-2)。年齢別では、0歳、65~69歳、70歳以上(それぞれ2人)、1~4歳、25~29歳(それぞれ1人)の報告であった(図2-13-4)。

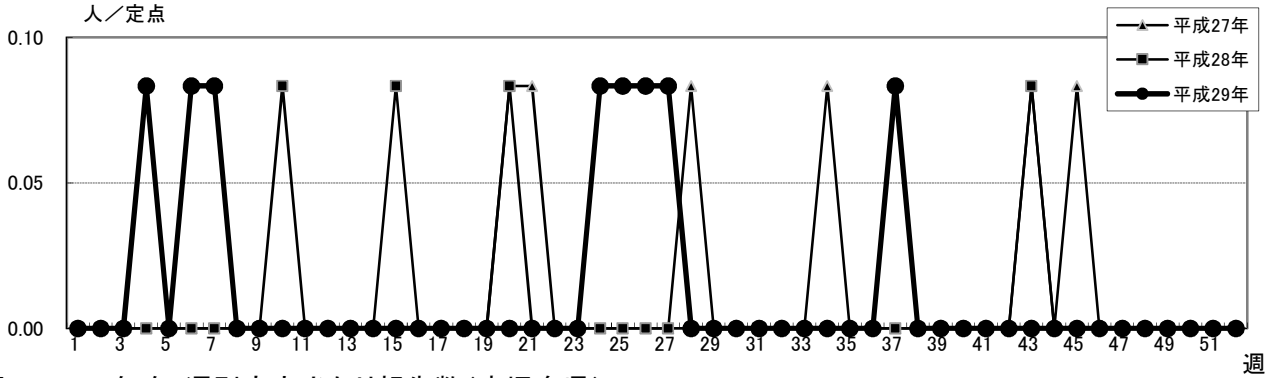


図2-13-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

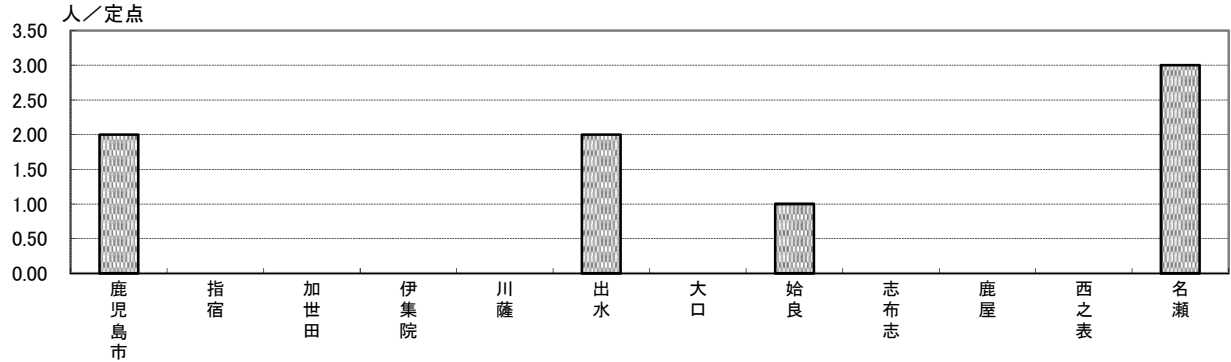


図2-13-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

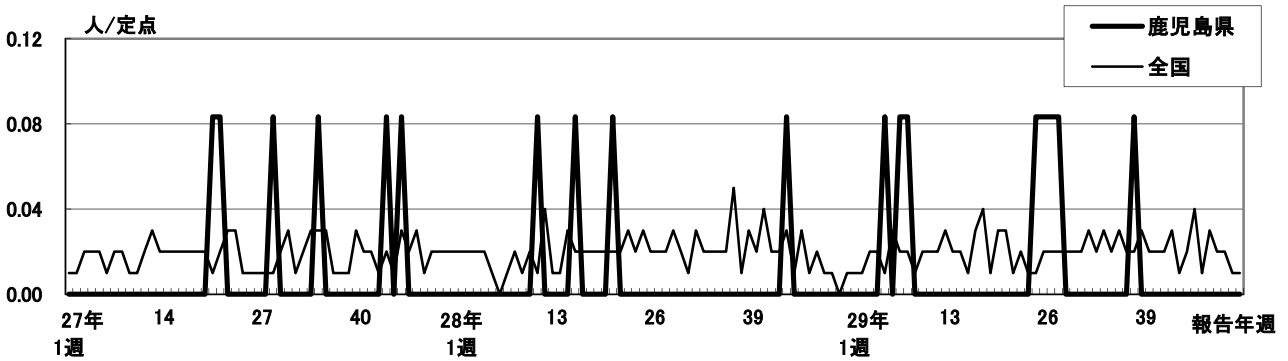


図2-13-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

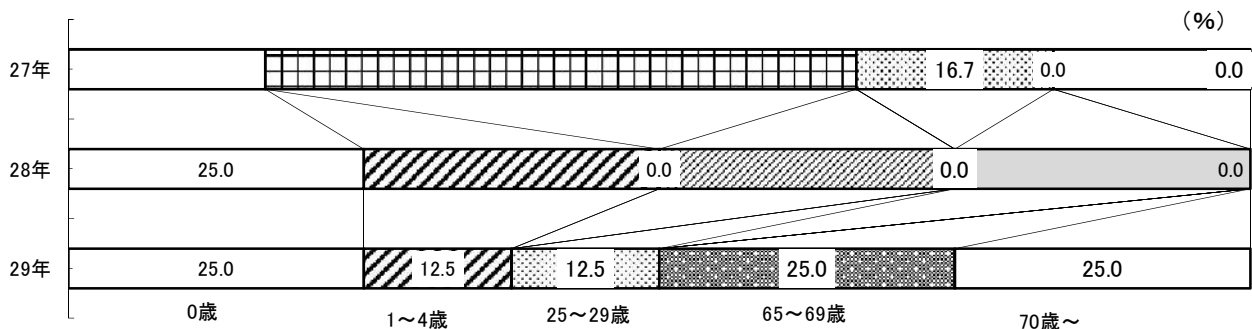


図2-13-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

# 14)無菌性髄膜炎

(定義) 種々のウイルスを中心とした病原体の感染による髄膜炎の感染症である。

平成29年の無菌性髄膜炎は、基幹定点医療機関から11人(累積定点当たり報告数0.92)の報告があり、平成28年(20人)より9人少なかった。本県及び全国的にも大きな流行は認められなかった(図2-14-1、図2-14-3)。保健所別では、名瀬(4人)、鹿児島市(3人)、出水(2人)、伊集院、鹿屋(それぞれ1人)からの報告であった(図2-14-2)。年齢別では、1~4歳(2人)、30~34歳(2人)が多い報告であった(図2-14-4)。

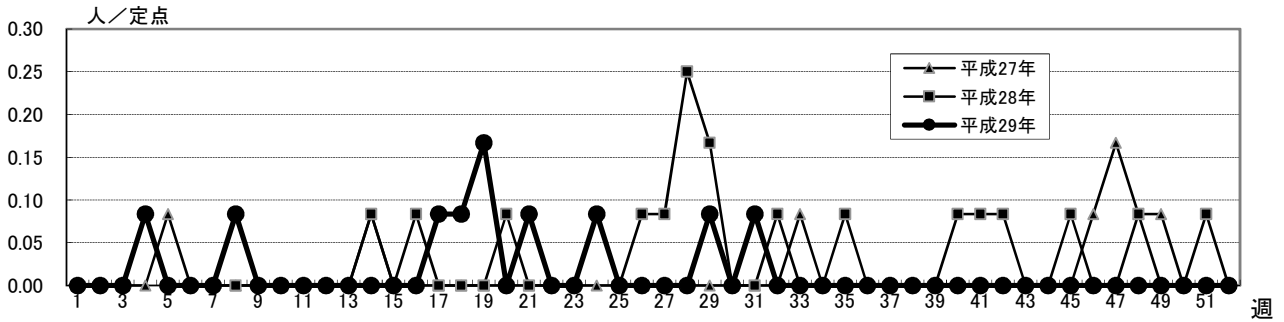


図2-14-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

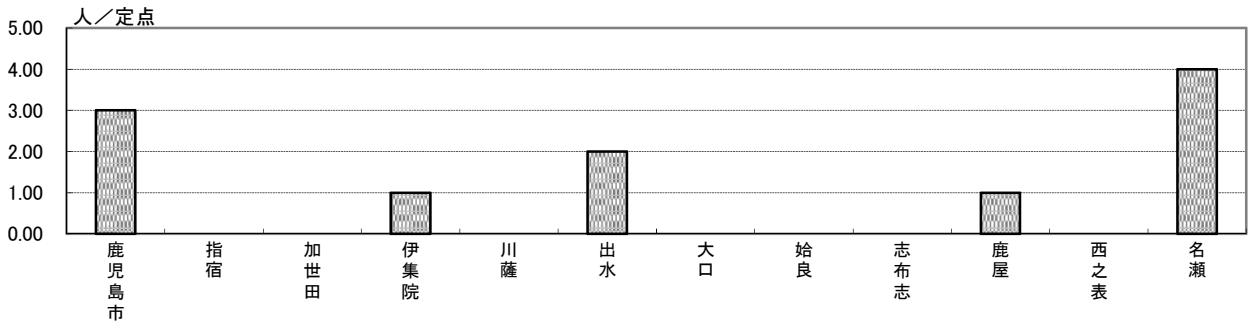


図2-14-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

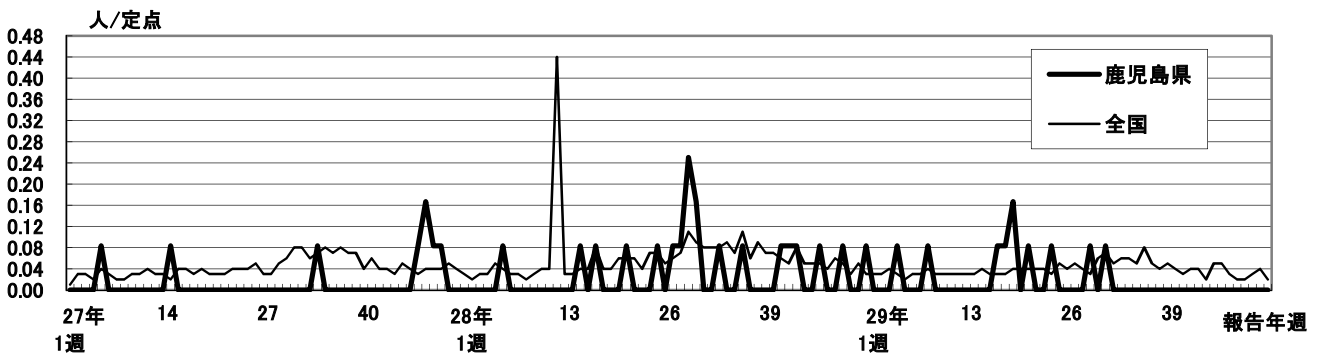


図2-14-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

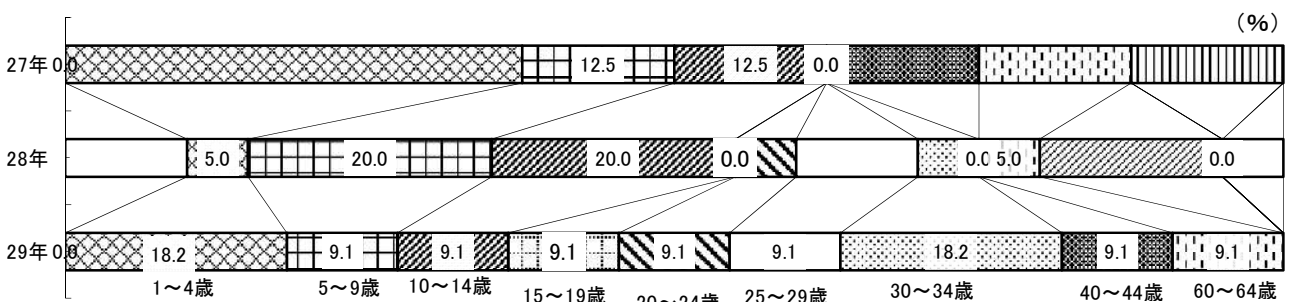


図2-14-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

# 15)マイコプラズマ肺炎

(定義) *Mycoplasma pneumoniae*の感染によって発症する肺炎である。

平成29年のマイコプラズマ肺炎は、基幹定点医療機関から36人(累積定点当たり報告数3.00)の報告があり、平成28年(252人)より216人少なかった。例年と比較すると第4週にピーク(0.33)があったが1年を通して低く推移した(図2-15-1)。また、全国と比較すると低く推移した(図2-15-3)。保健所別では、大口、出水、加世田の順に多く(図2-15-2)、年齢別では、5~9歳(38.9%)、1~4歳(22.2%)、10~14歳(19.4%)の順に多かった(図2-15-4)。

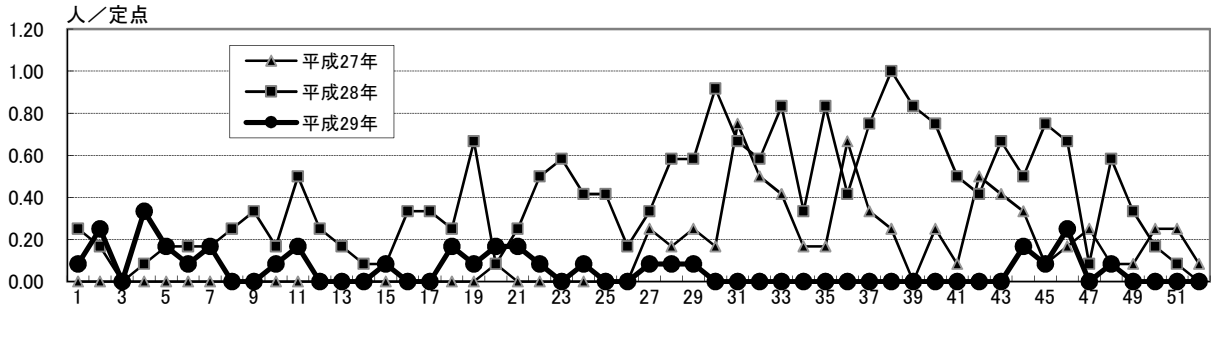


図2-15-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

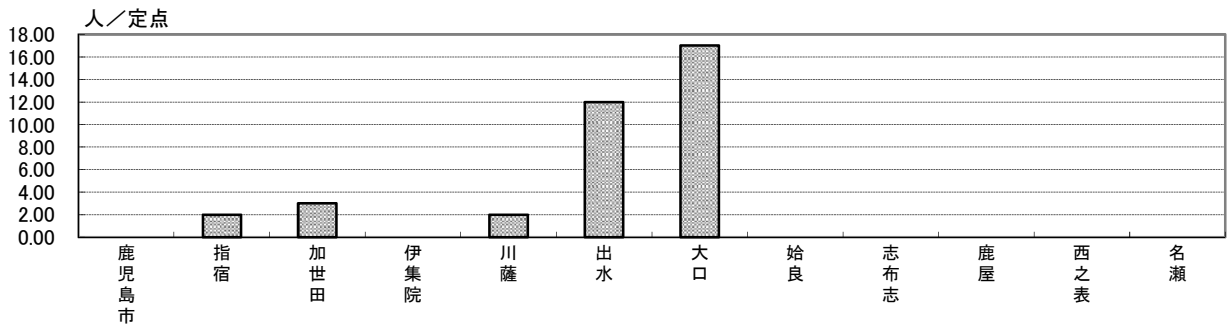


図2-15-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

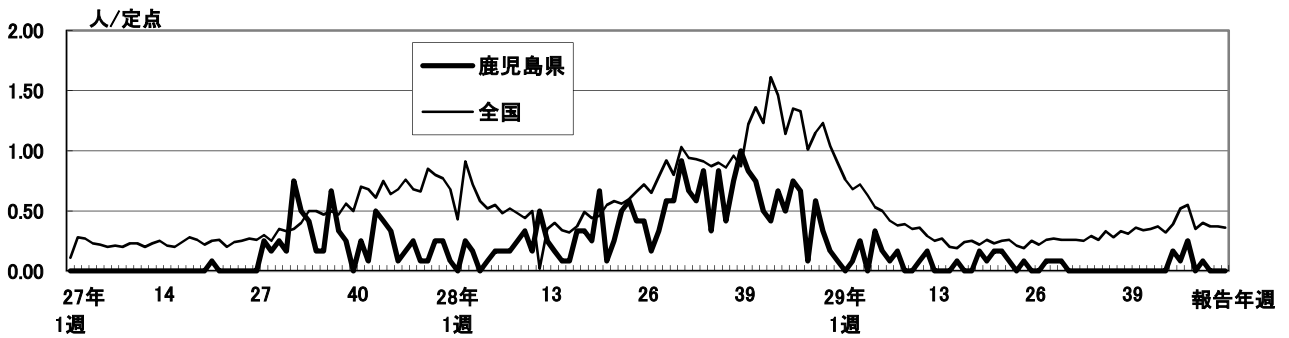


図2-15-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

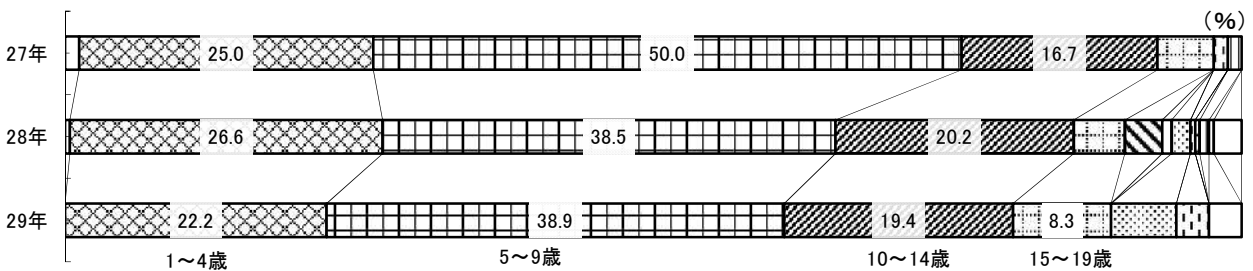


図2-15-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 16)クラミジア肺炎(オウム病を除く)

(定義) *Chlamydophila(Chlamydia) pneumoniae, Chlamydia trachomatis*の感染による肺炎である。

平成29年のクラミジア肺炎(オウム病を除く)は、基幹定点医療機関からの報告はなく、平成27年、28年も報告がなかった(図2-16-1)、(図2-16-2)。

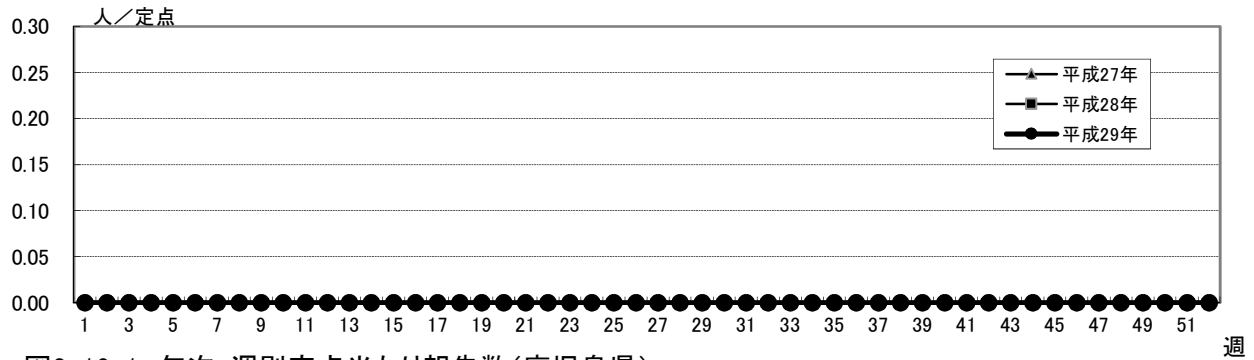


図2-16-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

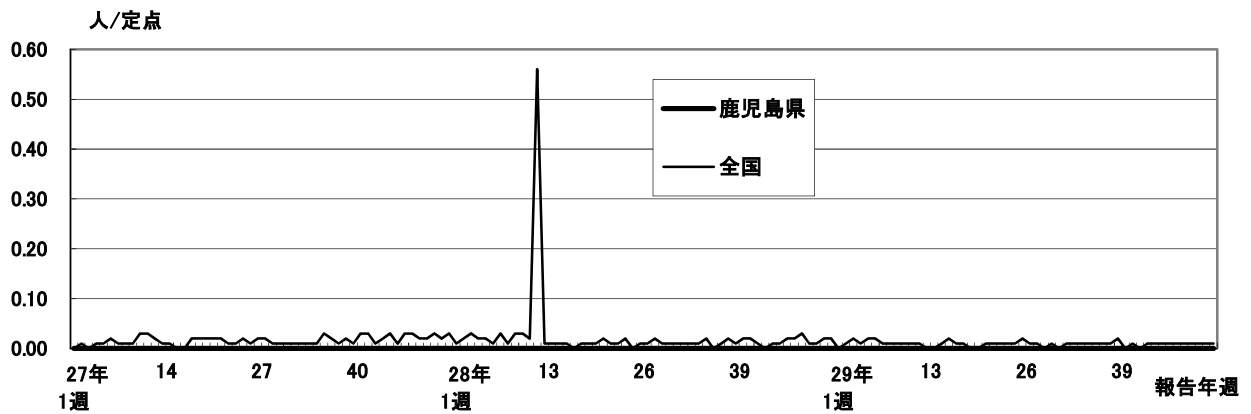


図2-16-2 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

# 17) 感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)

(定義) ロタウイルスの感染による下痢、嘔吐、発熱を主症状とする感染症である。

平成29年の感染性胃腸炎(病原体がロタウイルスであるものに限る)は、基幹定点医療機関から109人(累積定点当たり報告数9.08)の報告があり、平成28年(129人)より20人少なかった。第11週から第17週にかけて3峰性を示し、第11週(1.25)にピークが認められた(図2-17-1)。全国と同様に推移が認められた(図2-17-3)。保健所別では、大口、名瀬、鹿屋の順に多く、年齢別では、1~4歳(66.1%)、5~9歳(25.7%)、0歳(6.4%)の順に多かった。(図2-17-1、図2-17-2、図2-17-4)。

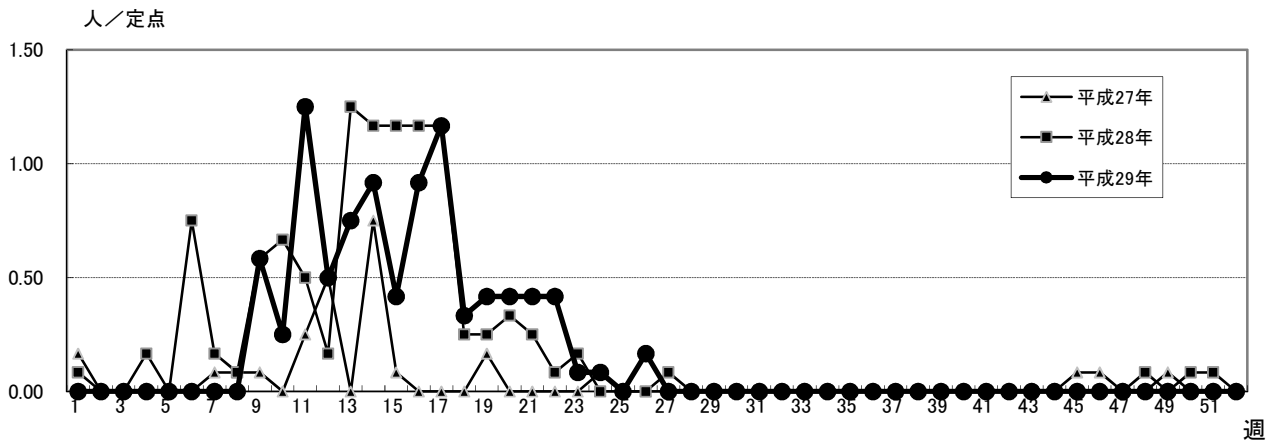


図2-17-1 年次・週別定点当たり報告数(鹿児島県)

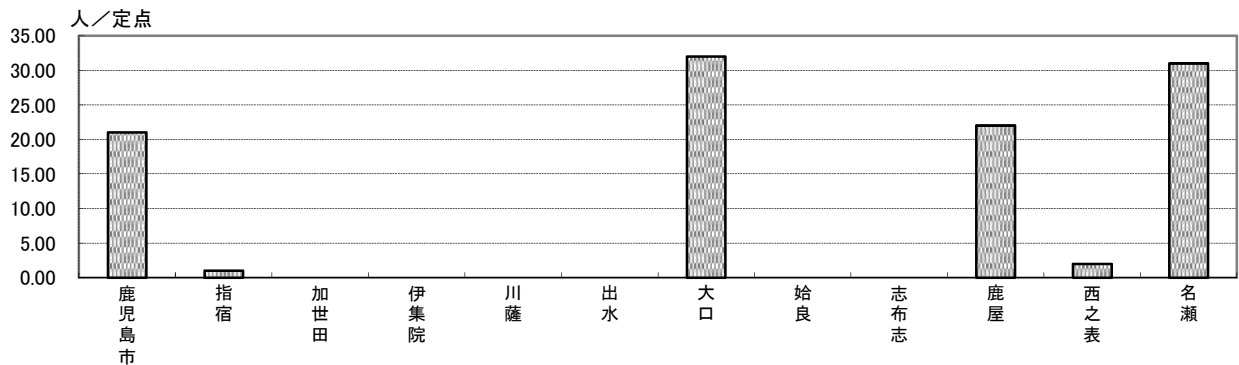


図2-17-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

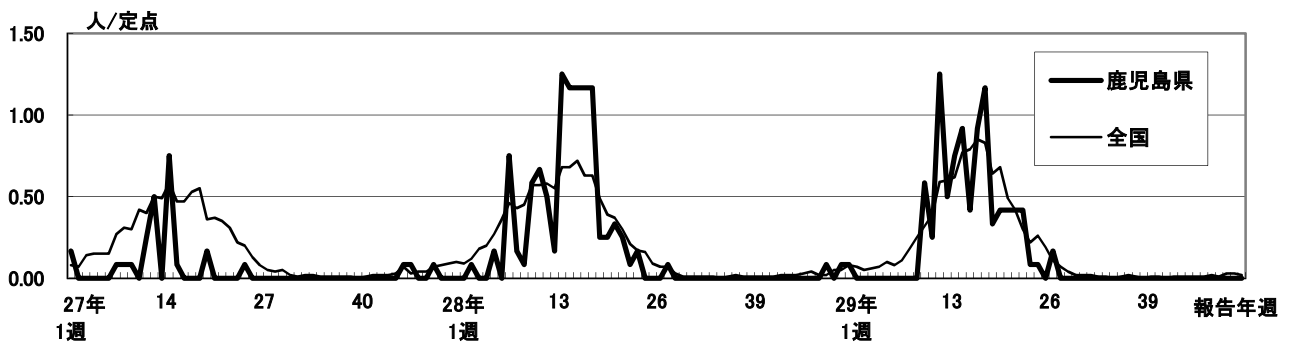


図2-17-3 定点当たり報告数(鹿児島県, 全国)

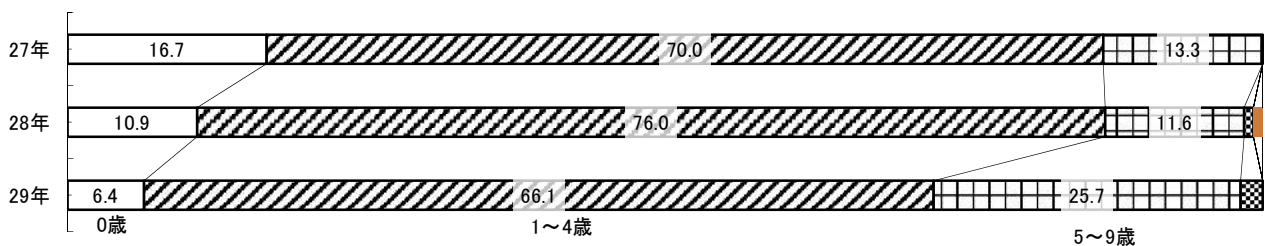


図2-17-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

## 18)メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

(定義) メチシリンなどのペニシリン剤をはじめとして、β-ラクタム剤、アミノ配糖体剤、マクロライド剤などの多くの薬剤に対し、多剤耐性を示す黄色ブドウ球菌による感染症である。

平成29年のメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症は、基幹定点医療機関から128人(累積定点当たり報告数10.67)の報告があり、平成28年(128人)と同数であった。月別報告数では、11月(15人)が最も多かった(図2-18-1)。全国と比較すると、年間を通して、全国よりも約3分の1の低値で推移した(図2-18-3)。保健所別では、出水(35.00)が最も多く、次いで鹿児島市(33.00)、名瀬(22.00)が多く(図2-18-2)、年齢別では、70歳以上の割合が64.8%を占めた(図2-18-4)。

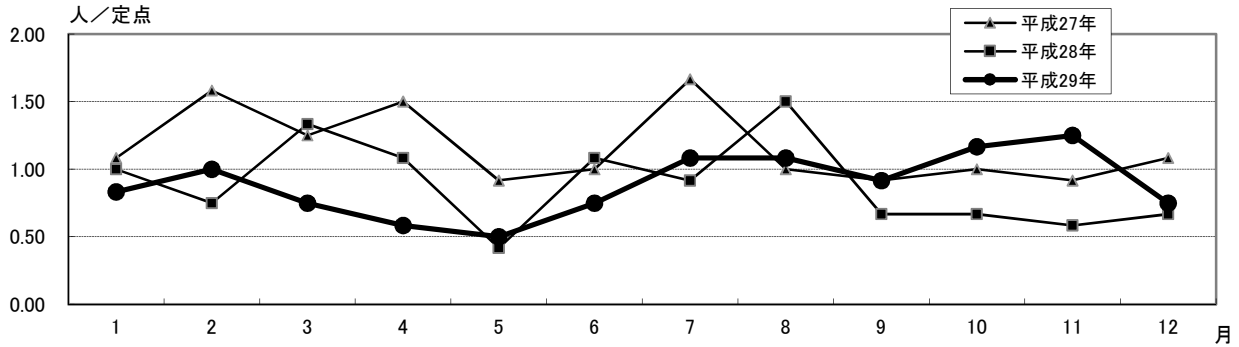


図2-18-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

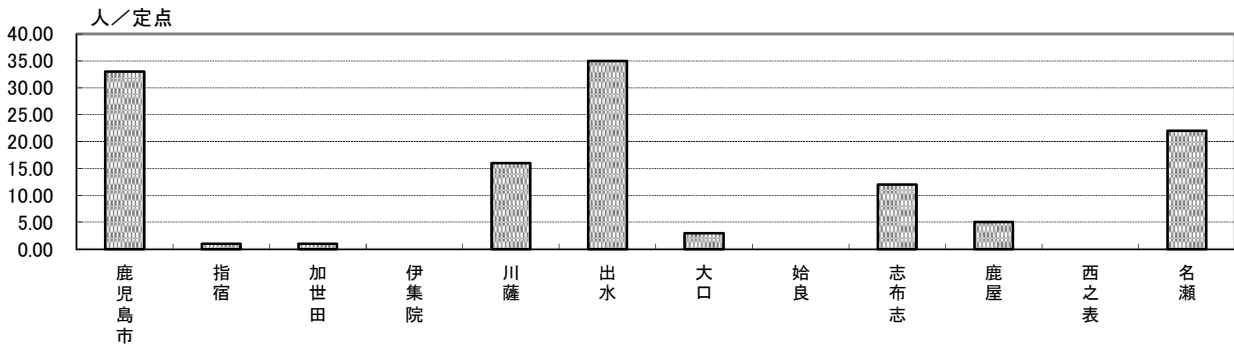


図2-18-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

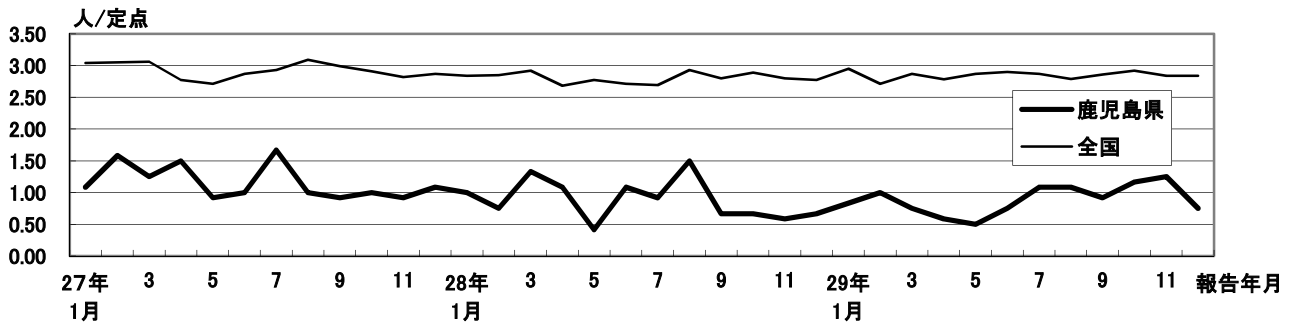


図2-18-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

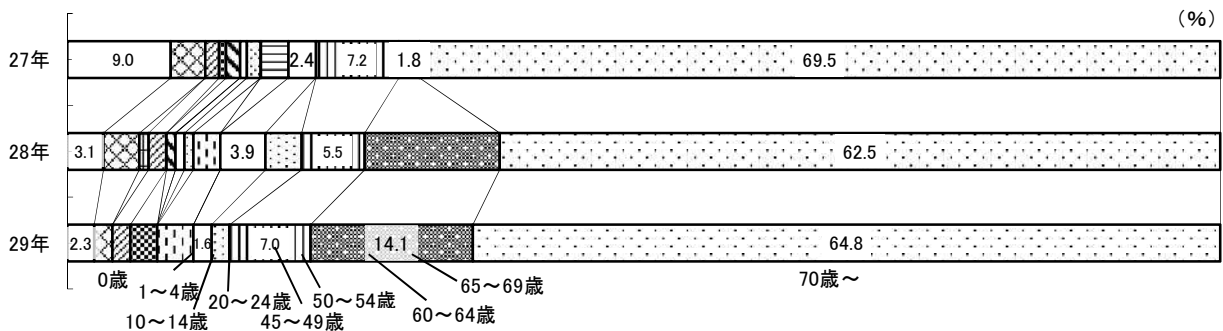


図2-18-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)



## 19)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

(定義) ペニシリンGに対して耐性のある肺炎球菌による感染症である。

平成29年のペニシリン耐性肺炎球菌感染症は、基幹定点医療機関から16人(累積定点当たり報告数1.33)の報告があり、平成28年(7人)より9人多かった。保健所別では、鹿児島市(16.00)からの報告であった(図2-19-1, 図2-19-2)。また、全国と比較しても、年間を通して全国よりも低値で推移した(図2-19-3)。年齢別では、1~4歳(31.3%), 70歳以上(25.0%)であった(図2-19-4)。

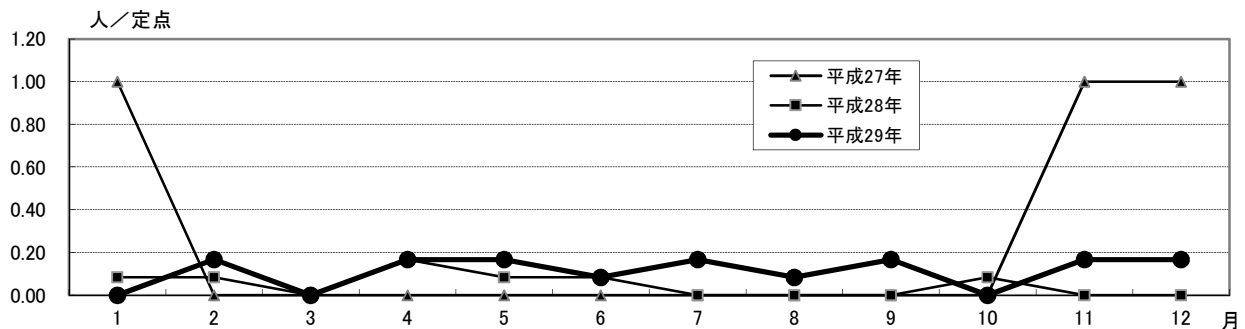


図2-19-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

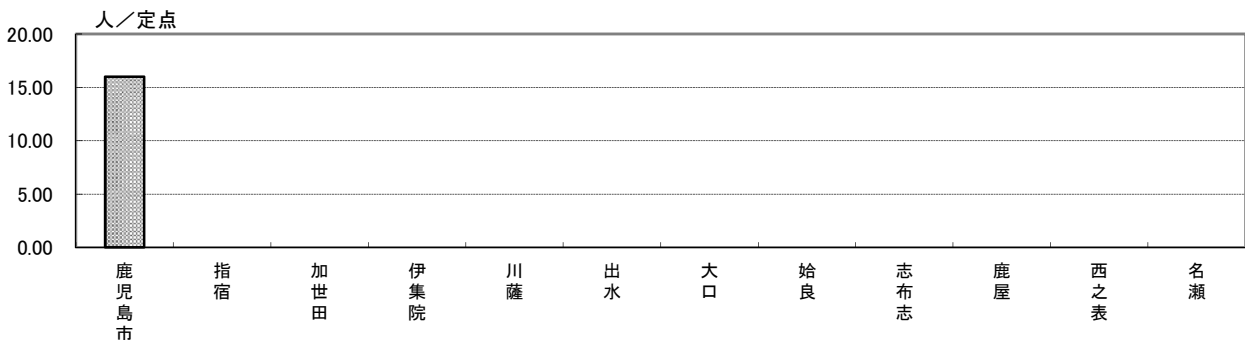


図2-19-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

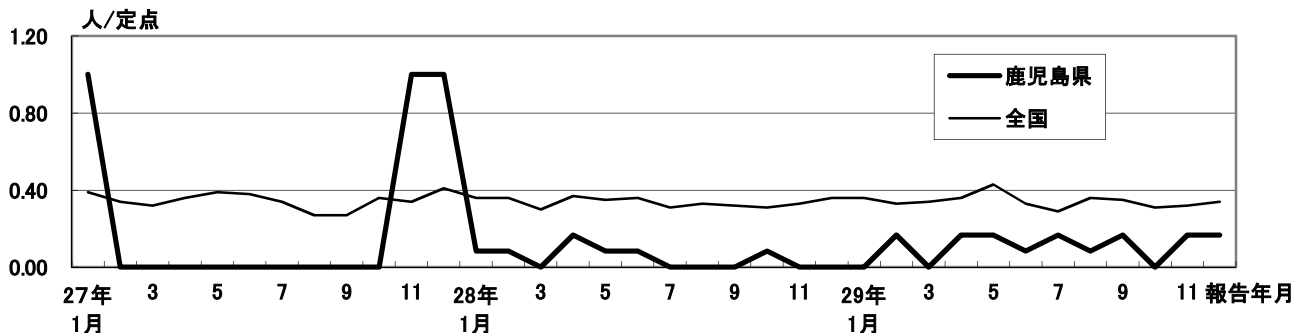


図2-19-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

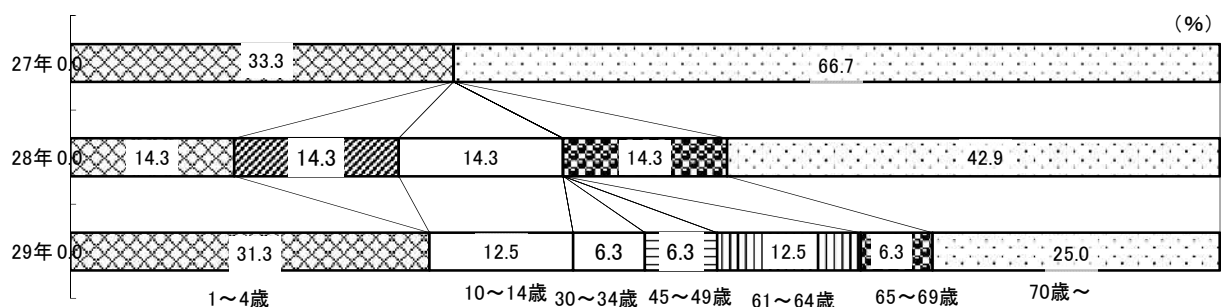


図2-19-4 年齢区別患者発生状況(鹿児島県)

## 20)薬剤耐性緑膿菌感染症

(定義) 広域β-ラクタム剤, アミノ配糖体, フルオロキノロンの3系統の薬剤に対して, 耐性を示す緑膿菌による感染症である。

平成29年の薬剤耐性緑膿菌感染症は, 基幹定点医療機関から報告は1人であった(平成28年報告なし)。12月に伊集院保健所から報告された70歳以上(1人)であった。

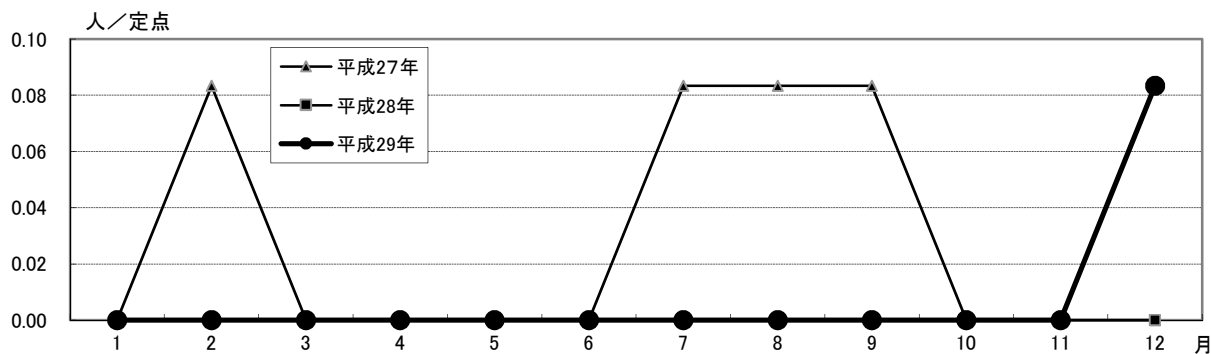


図2-20-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

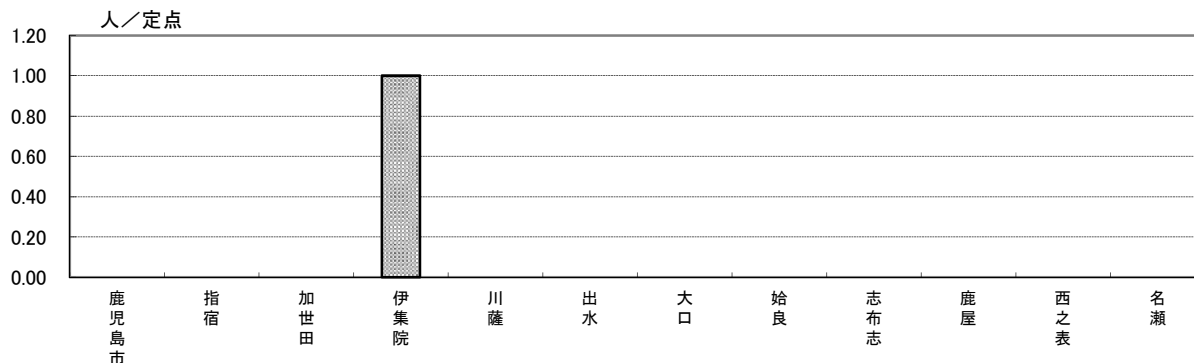


図2-20-2 定点当たり報告数(平成29年保健所別)

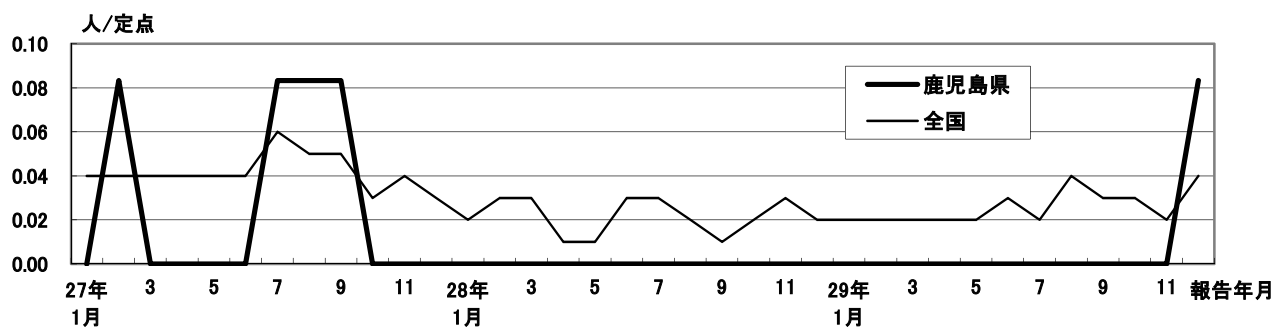


図2-20-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

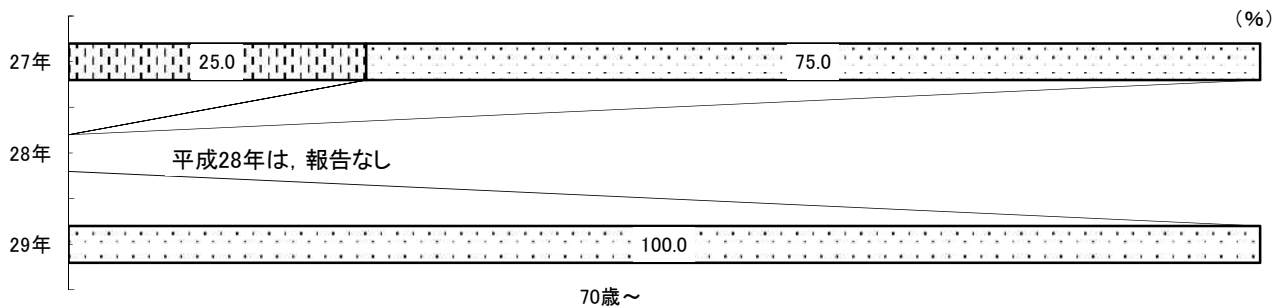


図2-20-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)